

1 危険予測学習の進め方

(1) 危険予測学習 (KYT) とは

危険予測学習は、危険予知訓練とも言う。1970年代に労働省関係の中央労働災害防止協会や日本企業が、ヨーロッパにおいて交通安全教育に使われていたシートに注目し、工場での製造作業等の事故発生を未然に防ぐことを目的に、その作業に潜む危険を事前に予想し、指摘しあう訓練として発達してきた。呼称として、危険予知訓練のローマ字表記である「Kiken Yochi Training」の頭文字をとってKYT (ケーワイティー) とも呼ばれる。

その後、社会人の交通安全教育での活用も広がり、文部科学省は平成14年3月に「交通安全に関する危険予測学習教材 (小学校4～6年生用)『次はどうなる?』」をまとめ、全国の小学校に配付した。

現在では、学校安全の3分野である「防犯を含む生活安全・交通安全・災害安全」における安全教育での活用意義が認められており、簡単な学習を通じ、幼児児童生徒 (以下「児童等」という。) が危険性を主体的に学び、事前に予測できる事故や災害の発生を未然に防止できる有効な手法とされている。

(2) 活動手法

短い時間を活用した危険予測学習の活動手法として以下に示す「4ラウンド法」が一般的である。

企業などでは、作業にかかる前、ミーティングの中で、その作業に潜む危険を短時間で話し合い、「これは危ないなあ」と危険に気づき、これに対する対策を決め、行動目標を立て、一人ひとりが実践するという取組を行っている。

学校の安全教育においても、同様な活動が考えられ、交通安全教育の活用例として「(4)交通安全KYTの展開例」を示す。

段階	活動目標	活動内容
現状把握	どんな危険が、潜んでいるか	<ul style="list-style-type: none">・どのような危険が潜んでいるか、問題点を指摘させる。・問題点の指摘は自由に行わせ、他のメンバーの指摘内容を批判するようなことは避ける。
本質追究	これが、危険のポイントだ	<ul style="list-style-type: none">・指摘内容が一通り出揃ったところで、その問題点の原因などについてメンバー間で検討させ、問題点を整理する。
対策樹立	あなたなら、ど	<ul style="list-style-type: none">・整理した問題点について、改善策、解決策な

	うする	どをメンバーにあげさせる。
目標設定	私たちは、こうする	<ul style="list-style-type: none"> ・あがった解決策などをメンバー間で討議、合意の上、まとめさせる。 ・合意結果は、掲示したり、ミーティングなどで情報交換したりして、メンバー間の共通認識として情報を共有し、事前の危険回避を図る。 ・このような活動を定期的に行ううちに、日常の作業をただ流すだけでなく、常に、何か危険は潜んでいないかと各自に考える習慣を身につけさせることも期待できる。

(3) 交通安全KYTのねらい

交通安全教育における危険予測学習のねらい等について、大阪大学名誉教授、長山泰久氏が以下のように語っている。

「車を運転する場合にも、歩く場合にも、安全上、今の状況から『次はどうか』が読めている必要がある。

危険予測は、今日、強調されている参加型教育を行うにあたっての最良の教材である。事態はどのように展開し、どのような危険がおこり得るか各人が話し合うことで、自分が考えてもいなかったことを人の意見から学び取ることができる。

今後の危険予測教育の課題を考えるにあたって、運転者教育から歩行者・自転車の教育へ、ヒューマンファクターレベルの危険要因を用いた教育への展開などが考えられる。

幼児段階では『次はどのようなのでしょうか?』『何をしながらしているのでしょうか?』と、危険予測のもととなる心の働かせ方を訓練しておく必要がある。小学校・中学校・高等学校と進むにつれて、歩行中、自転車乗車中、原付運転中と訓練し、いつも次の状況を考え、そこで出会う人の心を読む習慣が身についた人作りを試みる必要がある。

事故発生要因を分析してみると、事故原因となる運転者が犯すヒューマンエラーの背後には、ヒューマンファクターといわれる人間の心理に基づく問題が多いことが明らかになる。

例えば、『深夜だから車も人も通らない』と思い込んでいると安全確認は行われぬ。安全確認を怠ることがエラーであり、車も人も通らないとの思い込みがヒューマンファクターである。思い込み以外にも、興味・関心対象への脇

見、急ぎの気持ちなどがヒューマンファクターレベルの危険要因である。これらの人間が陥る落とし穴であるヒューマンファクターレベルの危険源に関しての危険予測を採用することが必要である。」

(社団法人日本損害保険協会「予防時報」2002年7月号から抜粋・要約)

また、文部科学省作成「交通安全に関する危険予測学習教材（小学校4～6年生用）」後書きには、以下のようにある。

最近、交通安全教育の新しい教育内容・方法として「危険予測」が提起されてきています。今回作成した、小学校4～6年生対象の交通安全に関する危険予測学習教材「次はどうなる？」が、各学校で活用されることによって、交通安全教育の大きな質の転換が期待されます。

道路上を歩き、自転車に乗り、また自動車に同乗するなど、子どもたちはさまざまな形で交通社会に参加しており、道路交通の中で安全に行動するためには、交通ルールを守るとともに、行動の経過にともない状況がどう展開し、変化するかについて関心をもつことが非常に重要です。例えば、その場面に即して「次はどうなるか？」「あの人の気持ちは？」ということ常を常に考え、その展開を読める（予測できる）力を身に付けることにより、「危険予測」は危険に対処するとともに、人の心を理解し、読む（予測する）というような人間の感性を磨くことに繋がります。

本教材は、危険を含んだ場面のイラストを元に、子どもたちがそこで生じ得る危険状況をイメージし、皆で考えを述べ合い、その危険に対してどのように対応すればよいかを話し合う参加型学習ができるように工夫しています。

また、危険予測の訓練（学習）は頭の中で「こういう場面・状況ではこのように事態は展開する」というイメージを描くところから始まり、具体的にイメージを描く訓練によって、イメージ豊かな人間が形成されます。

さらに、そこから一歩進んで、イラストと同様な、そして類似の現実の場面で、観察・体験学習に発展させ、事実をよく理解することが必要です。そして学んだことを現実の場面で実践し、いつも安全 - 危険を考えながら行動できる力の基盤を身に付けることにより、生涯にわたって安全な生活が可能となるのです。

(4) 交通安全KYTの展開例

通学路等の何気ない日常の風景を写真に撮ったり、イラスト図として書いたりして、それらを児童等の前に提示し、以下の展開で学習する。

なお、学習時間は、1単位時間を使う活動、朝の会・終わりの会など短い時間での活動の両方が想定される。

学習内容	指導上の留意事項等
交通状況の読み取り (個人～発表)	<ul style="list-style-type: none"> ・自らがイラスト中の歩行者の立場となって、状況を詳しく把握させる。 ・言葉で表現し、発表させる。
危険の予測と、重大な危険の選定 (発表～話し合い)	<ul style="list-style-type: none"> ・この場面で起こり得る危険を発見・予測し、その根拠を述べさせる。 ・どのような意見でも肯定的に受容する。 ・「見えている危険」と「見えていない危険」に分けて板書するのもよい。 <hr style="border-top: 1px dashed black;"/> <ul style="list-style-type: none"> ・最も危険な項目を2～3選定する。
回避方法の考察 (話し合い)	<ul style="list-style-type: none"> ・どのようにしたら危険が回避できるか、話し合わせる。 ・自己、他者が陥りやすい心理特性なども考えて、最もふさわしい方法を話し合わせる。 ・回避方法の根拠を明らかにさせる。
まとめ	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の言葉でまとめさせる。 自分が取る行動の危険性 危険予測の重要性「自分の命は自分で守る」 危険回避の具体的行動の明確化 人命尊重の意識の醸成

学習内容の を「危険の予測」と「重大な危険の選定」の2段階と捉え、全体を5段階で展開する方法もある。

資料は印刷したり、プロジェクター等で提示したりするとよい。

学級活動の1単位時間や朝の会等を活用し実施する。

一斉学習だけでなく、導入後、4、5人のグループに分けて、 の活動を行い、最後にグループごとにまとめを発表させる方法もよい。

グループを進める場合は、簡単なワークシートを作成し記入させるとよい。

イラストの代わりに、学校周辺の危険な場所の写真等を用いるなど、各校の実情に応じて工夫するとよい。